

争論 こだわる生協、広がる生協

こだわるコープ自然派奈良は、 どう広げようとしているのか

辰巳 千嘉子

生活協同組合コープ自然派奈良理事長

聞き手：杉本貴志（関西大学教授）



商品のこだわりと独自性

【杉本】 コープ自然派は、よつ葉牛乳の共同購入会などを母体に生まれた生協で、その名の通り、「自然派」を自認されています。国産や有機にこだわっていることで有名ですが、たとえば日本生協連のコープ商品などは扱っていないのですか。

【辰巳】 日本生協連の商品は2003年から扱っています。コープ自然派では商品カタログを2媒体化しているのですが、メインカタログの「ポスティ」は国産にこだわり加工品は基本的に無添加、有機農業推進のために農薬基準もかなり厳しく設けています。もうひとつの「CaoCao」は、若い世代も使いやすい加工品を中心としたカタログで、こちらにアミノ酸などの化学調味料を使っていない日本生協連の商品を導入しています。

【杉本】 「ポスティ」の生鮮品は、農薬その他について自然派の厳密な基準に基づいて検査をして、それにパスしたものだけを載せているのですか。

【辰巳】 基準にもとづいた履歴の確かなものを載せています。除草剤や土壌消毒剤は使わず、化学肥料や農薬はかなり厳格な基準で運用しています。すべて自主検査でき

ているわけではないのですが、使った農薬や肥料はすべて公開し、無農薬有機野菜は残留農薬検査を行っています。加工品も第三階層まで追求できる体制で、遺伝子組み換えの有無や添加物などはカタログに表記して、放射能検査結果も公開しています。

【杉本】 もとは「ポスティ」しかなかったけれども、より幅広い商品を提供するために、そこまで厳密ではないけれども大筋で自然派の考え方に合うものについては、日本生協連の商品も含めて、おすすめ品を「CaoCao」に載せるということですね。

【辰巳】 いろいろなニーズにあうおすすめ品がないと新しく加入された方が買い物に困りますよね。私がコープ自然派に加入した当時はまだ「CaoCao」はなくてシンプルですっきりしていたとも言えますけれど、買い物の楽しさは品揃えに応じて広がったと思います。それと日本の農林水産業を守る「国産派宣言」という柱がありますので、たとえばインドネシアの乾燥コンニャクは現地の村おこしのためにつくられた、とてもいい商品なのですが、原料が外国産なので「CaoCao」に掲載しています。

【杉本】 そうすると、「ポスティ」に載っている食品は完全に国産ということですか。

【辰巳】 完全とは言えません。農畜水産物は国産で、米、小麦粉、大豆などは加工品の原材料まで国産ですが、香辛料や油、コーヒーなどは難しいですね。果物も原則国産ですが、バナナは外国産です。国内で生産が難しいものは有機 JAS 認証のあるものをという基準です。



caocao33 号

有機農産物の価格と供給

【杉本】 そうしたこだわりの生協だから、どうしても価格が相当高くなるだろうと思っていたのですが、これを拝見すると、むしろくちや高いわけではありませんね。

【辰巳】 意外と安いでしょう。とくに有機野菜が安いのにびっくりされる方が多いです。組合員の 70% が 30～40 歳代の子育て層ですので、買いやすい値段は必須ですね。省農薬野菜より有機・無農薬の方が安いこともときどきあって、いまコープ自然派で取り扱う農産物のうち、有機・無農薬の割合は 7 割に近づいています。恵まれた

ごく一部の人たちだけが安心・安全なものを食べられるというのではなくて、「誰もが有機農産物を食べることができる社会」を目指したいと思っています。

【杉本】 カタログは、コープ自然派の各生協で同じものですか。

【辰巳】 はい。事業連合で制作して、四国と関西 9 府県の会員生協が同じカタログを使っています。

【杉本】 組合員さんは何人ぐらいですか。

【辰巳】 奈良の組合員は 1 万人を超えたところで、大阪や兵庫は約 3 万人、事業連合全体では約 13 万人です。

【杉本】 それぐらいの規模であれば、有機など、こだわったものを安定して届けることができるということでしょうか。欠品問題など起こらないのですか。今後、組合員が拡大しても、大丈夫なのでしょう。

【辰巳】 欠品問題はコープ自然派でも大きな問題です。とくに原発事故後は食の安全に不安を持つ組合員さんが入ってこられて前年比 110% の伸びが続きましたので、産直の野菜や肉の供給が追いつかず大変でしたが、有機農産物の供給に関しては、有機農業者を育ててきたことが大きかったと思います。有機農業推進法が成立した翌年の 2007 年に「NPO とくしま有機農業サポートセンター」を立ち上げて「有機の学校」をつくりました。生態系調和型農業 (BLOF) 理論をもとにした栽培技術を学んでもらうのですが、植物の生理にあった土づくりで作物が健康に育つので、おいしくて栄養価が高いだけではなくて、たくさ

ん採れるようになるのです。

昨年は農産物の安定供給のために、青果専門の会社「コープ有機」を設立しました。産地と連携して計画作付けを行う産地プロジェクトが始まって、新しい有機の産地も増えて、うれしいことに欠品がずいぶん減りました。が、今度はまた新しい課題も出てきていますが。有機野菜の供給を増やすために、がんばってたくさん作ってとお願いしたら、元気な生産者がすごい量の有機野菜を作ってびっくりしたことがあります。作付け時に「全量買うから、がんばって作って」と言えば、「作りたい」という農業者はおられますし、生産調整は大変そうですが、育成機関と流通、消費をつなぐ仕組みが少しずつ身を結んできたように思います。

こだわりをどう広げるのか

【杉本】 組合員が拡大すると、いままでの13万人とはちょっと違った考えの方も生まれてくるでしょうが、いまのこだわりを今後も堅持しようとお考えですか。

【辰巳】 そのつもりです。ただ、中心層の子育て世代は共働きが多くて、これからも女性の社会進出は増えていくでしょうし、高齢者も含めた単身世帯も増えていきますし、暮らし方に応じた便利な商品やサービスを提供していくことは大切だと思います。時間をかけずに安心な食事が作れるように産直の肉や魚と野菜、タレをセットした「食材セット」はとても人気があって、供給を伸ばしています。愛知県の友好生協連合会「アイチョイス」と一緒に食材セットの会社を立ち上げて神戸に新工場をオープンしましたが、野菜をたくさん使う食材セットは余剰野菜の使い先としても有効なので、生協間連携で農産物を買って支える土

壤を広げていきたいと考えています。

【杉本】 組合員層の広がりに対しては、安心・安全で妥協するのではなくて、使いやすさの点で広がりを目指して、安心・安全の部分は絶対に譲らないということですか。

【辰巳】 そうありたいですね。持続可能な地域や農業、環境をめざして組合員活動と事業が一体となって取り組んでいます。コープ自然派の取り組みは、有機農業、NON-GMO、自給飼料、アニマルウェルフェア、脱原発などいろいろありますが、どれも「子どもたちの未来のために」という言葉で説明できると思います。どんな社会を残したいかということですね。

例えば、冬水田んぼ(冬期湛水)や無農薬・省農薬の田んぼが増えた主力米産地の徳島では、兵庫県豊岡市以外では初めて野生復帰したコウノトリが営巣して3羽が巣立ちするなど、コウノトリも棲める豊かな生態系の環境がよみがえりました。そういった保全活動に対して組合員のカンパで環境支払いを実施していますが、その成果は組合員だけのものではありません。

最近、組合員の理解の深さに感動した出来事があったのですが、実は今年度、徳島の無農薬米生産量がぐんと増えて省農薬米の生産量を超えました。無農薬米と省農薬米では価格差があるので、高い無農薬米をたくさん買ってもらえるか頭を抱えていたのですが、全生協で「無農薬米を食べよう」と題して学習会や試食会に取り組んだところ、なんと供給量が1.6倍にも増えたのです。来年度も無農薬米の圃場を増やせそうで、ほっとしています。

自然派農業を支える仕組み

【杉本】 コープ有機という株式会社の子会社をつくって、そこを通して有機農業の産品がコープ自然派に流れる仕組みをつくられましたが、そうすると生産者と生協側が、マーケットメカニズムではなく、自分たちで話し合っただけで価格や引き取り量を決めることになると思います。先ほど「全量引き取り」のお話がありましたが、農家が収穫した産品をすべて引き取るという全量引き取りも、かなりやっているのですか。

【辰巳】 若手のがんばっている有機生産者を中心に、あらかじめ買い支えることを約束して作ってもらっています。とても張り切ってすごい量の野菜ができたり、需要との調整が大変ですが、特価企画で通常週の 10 倍ぐらい出ることもあります。以前は有機野菜を表紙に取り上げるなんてできなかったのですが、若い生産者の元気な写真が表紙に載るのはとても魅力的です。

【杉本】 産直品の価格をどうするかというのも生協産直の課題で、価格競争により、かつてのように生産コストをカバーすることを保証することができず、産直品の引き取り価格を市場価格に連動させている生協も多くあります。自然派はどうでしょうか。

【辰巳】 有機農業の BLOF 理論を提唱されている小祝政明さんによると、ものが良ければ、消費者は市場価格より 2 割高くても買うということなので、市場価格の 125% を目安にしています。引き取り価格は、生産者が 6 割、中間業者が 1 割、コープ自然派が 3 割の「6 : 1 : 3」で明確に値付けすることを決めています。日本の農業を守

るための「国産派宣言」ですので、再生産可能でありたいですね。

有機野菜を選んでもらえるように、付加価値を伝えることにも力を入れています。いまの野菜は 50 年前に比べて栄養価が激減していますので、有機野菜の免疫力や解毒力、抗酸化力など栄養価の違いは大きな魅力です。少子高齢化社会での健康は本当に大切なテーマです。

有機農業の技術は飛躍的に進歩しています。作物が一番健康に育つ土づくりをすることで、光合成の機能がアップして、味が良くて栄養価が高い野菜がたくさんできる「高品質」「高収量」「高栄養」の有機栽培が可能になってきています。農薬を使わずに微生物が働ける環境を作ることによってふかの土になりますし、いくら有機堆肥を使っても、入れすぎるとバランスが崩れて虫のつきやすい硝酸態チッ素が高い不健康な野菜になってしまいます。土壌分析をして作物に応じたミネラルバランスを整えるなど、有機農業理論を学ぶ若い新規就農者がとてもがんばっておられます。たくさん収穫できれば価格を抑えることも可能になりますし。

【杉本】 いまは需要がないけれども、需要さえつくりあげれば、もっと安く、たくさん供給できる、ということですか。

【辰巳】 もうひとつ、生産者からの供給ルートも課題のようです。宅配業者を使っているのは運賃がかさんで価格が高くなってしまいますので。産地開発プロジェクトと並行して、生産者とコープ有機で共同物流をすすめています。

地域と地産地消

【杉本】産地との結びつきという点で、奈良の生協として究極的には奈良での地産地消みたいなことをめざしているのですか。

【辰巳】めざしてはいますが、まだ奈良にセットセンターをつくるのは無理なので、現時点での奈良独自の取り組みは産直米と野菜セットくらいです。この産直米は組合員活動から生まれたお米です。「田んぼの生きもの調査」ができる圃場を探して出て会ったのですが、天理市の卑弥呼の里といわれている纏向遺跡のそばにある田んぼなので、「大和ひみこ米」と名付けています。田んぼの食農体験イベントは生きもの調査などどれも人気で、収穫祭の「田んぼで運動会」には毎年150名くらい参加しています。生産者の南檜垣営農組合は2016年には農林祭の農林振興会会長賞などを受賞するほど、村の活性化につながっています。

奈良の野菜セットは地元の野菜を詰めあわせたボックスなので、生産者から直接納入してもらえます。新鮮で、旬がたっぷり、すごくおいしいんですよ。開始当初は自然派の基準にあわせるのが大変そうな様子もありましたが、最近は有機野菜がたっぷりと入るので、安全な圃場が増えているのかなと思っています。これを発展させながら地産地消を広げていければと思っています。この生産者とは組合員活動や地域の学校給食の取り組みも一緒に行っています。

【杉本】野菜セットは、自然派京都の組合員さんには京都の生産者の野菜セットが届き、自然派奈良の組合員には奈良の野菜が届くということですか。

【辰巳】基本的にそうです。一部、他府県から届く生協もありますが。それ以外にも、有機農業サポートセンター卒業生など次世代を担う若手たちを応援する「若手の畑応援セット」や「JAS有機認証セット」もつくっていて、野菜セットにはかなり力を入れています。各生協の野菜セットは産地交流できることも魅力です。

【杉本】近畿と四国で統一した事業連合で、食文化の違いが問題にはならないのですか。

【辰巳】大きな問題にはなっていませんが、味の好みの違いは少しありますね。でも、「自然派 Style」というPB商品も統一規格ですが、どの生協でもおいしいと好評です。

【杉本】それぞれの県ごとの生協で商品を開発するのは、現在の1万人とか3万人という組合員の規模ではちょっと難しいですね。

【辰巳】単独では難しいですが、地元の生産者と組合員と一緒に開発する商品もあります。各地域の商品をみんなでシェアして、ご当地企画やB級グルメも皆で楽しんでいる感じです。京都の和菓子や、徳島のソウルフード・フィッシュカツが登場したり、お正月前には香川の餡餅雑煮も出ますよ。

組合員への情報開示

【杉本】「ポスティ」を見ると、産地だけでなく栽培法や原材料など、カタログで提供する情報量がすごく多いと思います。

【辰巳】細かい字でいっぱい載っていますよね。実は、これが一番大切なところだと思っています。組合員に安心・安全な商品をお届けすることは大切な要素ですが、生協に

にとって大切なことは、「安全か、安心できるかは組合員が判断することだ」という視点を持つことだと思っています。

組合員が判断するための情報として、カタログには原材料や使用添加物、農産物の生産者や生産地、漁獲水域、遺伝子組み換えは畜産飼料まで可能な限り載せていますし、放射能検査情報や農産物の使用農薬・肥料の詳細も毎週配布して公開しています。そして、そうしたさまざまな情報への理解を深めるために講演会や学習会、体験活動などを実施しています。

最近、組合員がしっかりとカタログを見て選んでいることを実感したのは、ミツバチ失踪の原因として EU など規制されているネオニコチノイド系農薬について、今年の 4 月から排除に取り組む農産品にカタログ上のマークをつけたのですが、97%の方がマークの付いた商品を選んだのです。ここまでとは思わなかったのが、驚くと同時にとても頼もしく思いました。ネオニコ系農薬については、友好生協と連携したりレー学習会も行っています。

カタログには商品説明以外の情報もかなり載せていて、マスコミなど他では得にくい情報もあっておもしろいのですが、最近「いくらなんでも字が小さい。読めなければ伝わらない」と言われています (笑)。忙しい方も多いですし、スマホ注文も増えていますので、伝わる情報の届け方は、喫緊の課題として取り組みたいと思っています。

業態とプチパーティ

【杉本】自然派には店舗はないのですか。

【辰巳】ないんです。配送のみで、個人宅配は 1996 年に始まりましたので、規模のわりには早めかもしれませんね。

【杉本】個人宅配にすることで問題は生じなかったのでしょうか。

【辰巳】奈良の設立は 2002 年なので、その頃のことはよく知らないのですが、徳島で最初に生協化したのが 1991 年なので、個人宅配が始まった頃はまだ共同購入会的な性格が強かったのではないのでしょうか。共同購入会は 1976 年から続いていましたので。

奈良では個配がメインになってからのスタートで、組織づくりも手探りですすめてきましたが、いまはエリア活動や課題委員会・チームがみんなで年間 100 回程度の企画を開催して 2000 名くらいの方に参加していただいています。その他、フェスタや地域との連携活動も広がってきて、やっと少し地域に根づいてきた感じです。組合員さんは商品のおすすめや拡大にもとても熱心で、「プチパーティ」という拡大メニューは活動メンバーにも好評です。

「プチパーティ」は、組合員さんに組合員以外のお友だちを 2 名誘っていただいて、専任職員が組合員宅でメニューを作って食べながら生協のことをお話しする、ちょっとおしゃれな雰囲気のレストランです。

【杉本】当研究所も各生協の「パーティ」の研究を進めていますが、自然派のパーティは、必ずスタッフがついて試食の準備等をされている。非常にユニークですね。

【辰巳】しっかりと商品のことや食べ方などいろいろ話し込みますので、開催した組合員さんにとっても生協のことを理解する機会になっているようです。これに限らず、どの手法でもきっちり説明をして入っていただくように変えてから、1 人当たりの利用額がかなり違ってきたと思います。

【杉本】 配送は週に1度ですか。

【辰巳】 週2回までできます。「ぷらす便」と呼んでいる2回目の配送は、希望する組合員に有料でお届けしています。

【杉本】 他生協では、週2回配送に踏み切っても、どうも2回目はあまり注文してくれない、組合員は長い間、週1回の注文に慣れているのでむずかしい、という話をよく聞きますが、そういうことはありませんか。

【辰巳】 2回目はちょっと伸び悩んでいます。注文し忘れても配送の3日前まで注文できる「追加注文200」というサービスができたので、以前のように「あっ、買い忘れた。1週間どうしよう」ということがなくなって助かっていますが、いまは注文できるのが200種類なので欲しい商品がないことも多いので、500種類に増やして翌々日または翌日配達をめざしています。

【杉本】 30～40代の子育て世代の消費者の要求に対しては、週2回、翌日か翌々日に届くような業態を確立すれば、だいたい満足してもらえるだろうとお考えですか。

【辰巳】 ネット宅配がこれからどうなっていくか、ということでしょうか。もちろんサービスは更新していかないといけないでしょうね。ただ、これは個人的な意見ですが、今の規模でアマゾンフレッシュなどと同じ土俵に立ってもだめな気がします。どれだけ安心感や満足感を感じられるか、「生産者の顔がわかる」というだけならいくらでもあります。それだけでは、中身は本当に確かなのか、安心できない気がします。遺伝子組み換え食品も表示ではわかりませんし。生産者と一緒に地域の環境まで含め

た持続可能な農と食を作っているリアルなつながりの実感や、食農環境教育、本物体験など、他ではできない人や知恵との出会いも魅力だと思います。消費者である組合員自身がほしい商品を作っていけることが生協の魅力ですね。

【杉本】 共同購入や個人宅へお届けするという以外の業態は必要ないのでしょうか。

【辰巳】 小規模店舗との連携など、もっと便利な商品の受け取り方は模索していく必要があると思います。店舗は考えていませんが、組合員活動を発展させたことも食堂のような地域の拠点はつくりたいですね。

大きくなることをめざすのか

【杉本】 いかにこだわるのかと、いかに広めるのかというのは、単純に考えると対立するところがありますが、基本線は無農薬や有機など安全性に絶対の基礎を置きつつ、週にもう1回追加して配送するシステムとしたり、必ずしも時間をかけて手づくりで料理をする人だけを相手にしているわけではないので食材セットをつくったり、さまざまな工夫で広げようというお話でしたが、消費者の多数派になることをめざしているのか、それとも、いろいろな生協があることを前提として、多数派ではできないところをカバーしようと考えているのか、どちらでしょうか。

【辰巳】 少なくとも言えるのは、発言権のある生協になりたい、社会的な影響力を持てるようになりたい、ということです。

【杉本】 その理屈で「消費者の過半数を組織するのだ」と言って、昔のこだわりを後

退させてきたという戦後日本の生協の歴史もあるように思いますが、そうはならないということですか。

【辰巳】 組合員が何を選ぶかですが、情報公開していれば一定のラインはキープできるのではないのでしょうか。組合員はコープ自然派が大きくなることが目的で加入しているわけではないです。組合員には専門知識を持った方も多くて、基準を高める方向の厳しい意見もよく出てきます。事業と組合員活動が結びつくことでお互いに強めあってきましたし、これからもそうありたいですね。いまちょうど第一世代からの世代交代の時期を迎えていますので、産直の歴史の継承は私たちの切実な課題です。連合会全体で食の安全だけでなく公害など社会問題も含めて学んでいるところです。

過半数なんてとても言える規模ではありませんが、規模によってできることが増えますので、もう少し大きくなりたいですね。生協のパン工房で国産オーガニックのパンを作っているのですが、有機小麦の調達に苦労しています。適正価格で有機小麦をつくってくれる産地を探すのも大変ですが、ネックになるのは製粉ロットです。PB 開発でもロットが問題になりますので、生協間連携を広げているところです。

奈良では組合員が多い地域でも世帯率はまだ 3 % 程度。GMO フリーは世界的には大きなうねりとなっていますが、日本ではまだ少数派です。選挙や憲法などの勉強会には赤ちゃん連れの組合員が熱心に参加していますが、まだまだ少数派。安心して子育てができるように地域で仲間を増やしていきたいと思っています。

【杉本】 そして、それを支える生産の担い手も、必ず確保できるということですね。

【辰巳】 有機農業サポートセンターを卒業した新規就農者は全国で活躍して、しっかりと生産量を伸ばしていますが、日本でこのような例は稀だと高い評価を受けています。組合員（消費者）を組織する生協が育成機関と連携することで成果につながっているのだと思います。農業人口の減少や高齢化は深刻ですが、就農希望者の 9 割が有機農業に興味があるというデータもありますし、世界的にオーガニック市場は伸びていて、アメリカの成長率は年率 11.3%。日本でも一定数の需要はあるはずです。

東京オリンピック・パラリンピックを前にオーガニック食品への関心が高まりつつあります。オリンピック村で提供する野菜は、ロンドンでもリオでもオーガニックを取り扱うことに決まっていますので、オーガニック JAS 認証や G-GAP など国際的な基準に基づく安全性の担保が必要になってきていますが、日本ではまだ福島原発事故の収束が見通せない状態での開催ですし、一層安全性への担保が必要になるでしょう。昨年末、農林族の政治家が「日本の皆さんは日本の農産物は安全で美味しいと言われますが、そう思っているのは日本の皆さんだけです」と発言しましたが、いまの日本の農作物には世界的に説得できる安全性の根拠がなく、力量のある生協や連合会も取り組むべき課題ではないのでしょうか。

お隣の国、韓国から「協同組合都市・ソウル」を目指すというニュースが飛び込んできました。超高齢化して格差も広がっている日本でも、生協、農協、漁協、森林組合、共済、医療福祉、住宅など協同組合間協同のネットワークで地域コミュニティに貢献していく時期を迎えているのでは。協同組合の出番でしょうか。